

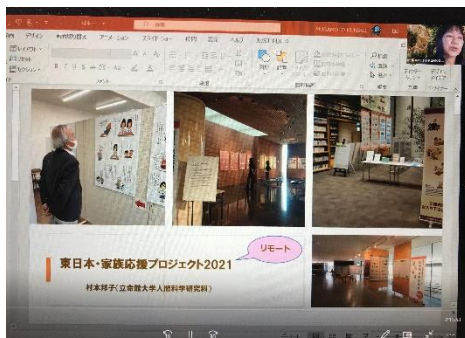
## 2019 年度 むつ・多賀城

村本邦子（立命館大学）

2021 年 2 月 20 日、ZOOM ではあるが、「東日本家族応援プロジェクト 2020 シンポジウム・リモートから復興の証人となった 1 年～聴く・学ぶ・繋がる」を開催した。今年は院生たちとシンポ企画委員会を立ち上げ、内容や方針など議論しながら形作っていった。午前の活動報告では、現地の方々を招いてのコメントや、修了生たちの報告を組み込み、「漫画展の働き」をテーマにした鼎談を含め、充実したものとなった。午後には、映画「飯舘村に帰る」の上映と、監督である福原悠介さんの講演の後、映画の中にインタビュアーとして登場する島津信子さんにも加わってもらい、修了生、現役院生とで、座談会「こころの復興と聴く力」、その後、ブレイクアウトルームに分かれてのシェアリングや全体討論など、こちらもかなり盛りだくさんのものとなった。とても良いシンポジウムだったと思う。

東北各地から、これまで協力頂いてきた方々が声を発してくれ、また初期の頃からの修了生たちの声もあり、大きな時間と空間を背景にした今という場が開かれ、そこにさまざまな思いが重ね合わされ、共有された。被災と復興の証人となる十年プロジェクトは、初めの頃、なかなか皆に理解してもらえなかったが、こんな形で見えてくると誰にとってもわかりやすいものとなり、その成果としてもたらされた繋がりネットワークの力によってみなエンパワーされ、発案者として幸福な気持ちになった。

今後の継続が課題だが、福原さんはじめ、若い世代が頼もしく頑張ってくれている。次世代にもっと委ねていけたらと思う。



## むつのプロジェクト

### プロジェクト

9年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」は、8月9日(金)～9月1日(日)団士郎家族漫画展をむつ市立図書館、8月30日(金)支援者支援セミナーをむつ市役所、お父さん応援セミナーをむつ市中央公民館、8月31日(土)漫画トークをむつ市立図書館にて開催した。今年もまた、むつ市長が顔をのぞかせてくれた。

支援者支援セミナーは、昨年、「人数が多すぎて見えにくかった、聞こえにくかった」との声があったため、人数を60名に限定したものの、当日の飛び入り参加者が結構あった。いつものように地元の事例を出してもらい、グループに分かれて検討した。

繰り返される転居、障害を抱えてシングルでの子育て、支援の拒否、DVなどさまざまな今日的課題が含まれており、私たちも多くを学んだ。アンケートでは、「今回のセミナーで、多角的な見方、考え方を再認識しました。地方のよさがわずらわしさにつながる。子どもの安全・安心を第一に考えると、周囲の大人の心を傷つける。常に両面を意識していかないといけないと実感しました。そのためにも様々な機関がつながり、役割分担をしていくことこそが家族みんなの幸せを拓いていくと思いました。ありがとうございました。」「事例を通してどうしても問題点を中心に考えてしまうことがあります。できることや強みを見

つけ、今後の支援に繋げていければと思います。」などの声が届いた。

翌日は、いつものように、漫画展をやっているむつ市立図書館での漫画トークがあった。







## 来さまい館

夜の部のお父さん応援セミナーは男性オンリーのため、女性たちは夜のフィールドワークに出かけ、来さまい館を案内してもらった。「来さまい」とは、下北の方言で「お越しください」という意味とのこと、1階は、インフォメーションとイベント用のスペースや会議室、2階には、下北地域を紹介する展示室「AGASSE 来さまい」がある。「文化・観光ゾーン」「エネルギーゾーン：むつエネルギープラザ」「ジオパークゾーン」「オーシャンゾーン」から成り、下北の観光や物産などの情報発信もしている。



「文化・観光ゾーン」では、ねぶた祭りの山車や衣装などの展示などがあったが、とりわけ面白かったのは、恐山のイタコの展示だった。イタコとは、死者の霊を呼びおろし、現世にいる人との仲立ちをする女性で、少女の頃から師匠のもとで厳しい修行を積み商売することを許されるのだそうだ。

独り立ちする時に、オラタカの数珠、弓、オダイジ（お守り）、袈裟、鑑札、錫杖、鉦、太鼓などの道具一式を師匠から譲り受ける。死者の霊を呼び出して語らせる口寄せのときに使う。口寄せは、神寄せ、ホトケ呼び、口説（死者の語り）、ホトケ送り、神送りの順で行われる。死後百ヶ日、または四十九日を過ぎたホトケを降ろ



すことができ、それ以前に降ろすと死者が迷うそうだ。イタコの人形は、恐山で袈裟をつけ霊を降ろしている姿に音声がついていた。



「エネルギーゾーン」には、「国のエネルギー政策に貢献する下北地域」という説明パネルがあった。安全性を前提に、エネルギーの安定供給を第一とし、経済効率性の向上による低コストでのエネルギー供給を実現し、環境への適合を図るため最大限の取り組みをしているが、下北地域には、むつ市の使用済み燃料中間貯蔵施設、六ヶ所村の再処理施設等、東通村及び大間町の原子力発電施設など、今日の原子力・核燃料サイクル政策を支える多くの施設が立地し、多大な貢献をしている。資源エネルギー庁では、こうした下北地域において、地域住民にエネルギー政策に関する情報提供やコミュニケーションの充実を図るため、ここに広報拠点として「むつエネルギープラザ」を開設したと書かれていた。

内容は、原子力は身近なものであり、安全性が高いこと、福島における原発事故を踏まえて様々な安全への取り組みをされていることが強調され、基本的に原発 PR セン

ターと同じ内容になっていた。

初め、無料で土曜の夜遅くまでやっており（休みなく、毎日朝 9 時から夜 9 時までオープンしているようである）、インフォメーションにはにこやかな女性がいたのに驚いたが、設置版の説明からなんだかそれも納得した。



「ジオパークゾーン」「オーシャンゾーン」には、下北の地形や海洋環境などとともに、「原子力船むつ」から「海洋地球船みらい」となった説明や模型なども展示されていたのも興味深かった。

1969年、世界で4番目の民間用原子力船として、「原子力船むつ」が進水した。しかし、試験運転中に放射線漏れを起こしたことから、母港であった大湊港への帰港反対運動が起きたり、当初の想定よりも点検費用などの運用コストが嵩むことが判明したこともあって、1992年1月に原子炉を停止し、解役工事が始まった。1997年、原子炉室を撤去した船体が海洋科学技術センター（現・海洋研究開発機構）に引き渡され、「みらい」として生まれ変わった。

2011年3月末には、福島第一原子力発電所事故による海洋汚染を調べるため福島県沖に派遣され、海水を採取したらしい。



空を飛ぶ大きな鳥の背に子どもたちが乗った「まさかりの大地」、海をはねながら進むイルカの背に子どもたちが乗った「海と生きる」という小学生による版画が展示されており、とても心惹かれた。





## フィールドワーク

終了後、院生たちは、恐山に向い、東通村、六ヶ所村原燃 PR センターへ行った。私たち教員は、遠野の方に向かうことにした。遠野博物館では、「遠野物語と神々」の特別展をやっており、これはなかなか面白かった。





河童淵では、親子がきゅうりをえさに河童釣りを楽しんでいた。

それから宮城の方を目指し、鳴子温泉に泊まり、仙台に向かった。本当は博物館に行こうと思っていたが、休館だったので、飛行機の時間まで、まだ行ったことのない七ヶ浜に車を走らせてみた。ここも被災のひどかったところだ。

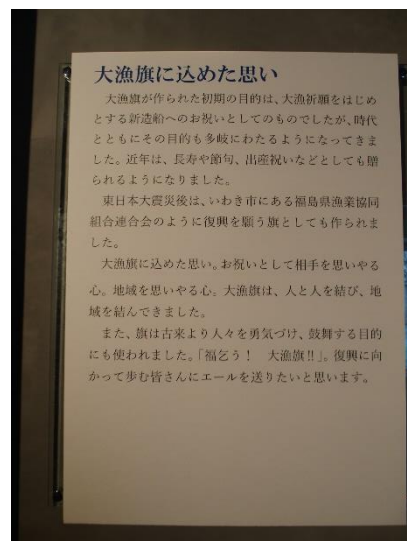
現在は、少しずつ新しい建物が立てられつつあり、海岸近くには「シチノリゾード」と書かれた洒落た建物があつた。そのなかのシチノカフェで昼食をとったが、丸ごと蟹の入ったシーフードパスタと、丸ごとピーチのパンケーキがとてもおいしかった。

車を走らせていると、途中、「国際村」の看板が見えたので、どんなところだろうと

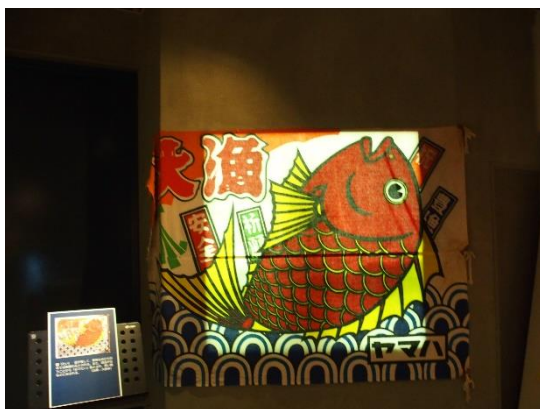
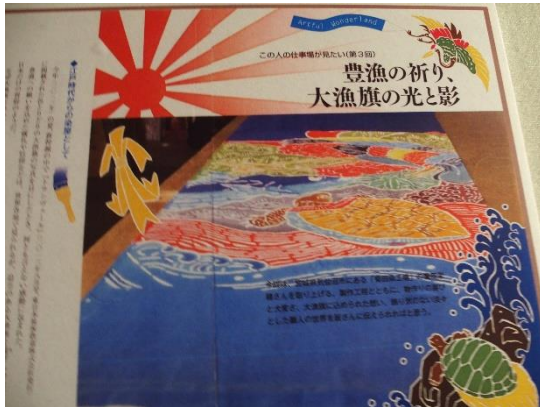
思い、寄ってみた。太平洋を一望できる自然の地形を生かし、恵まれた自然環境と外国人避暑地が開かれた国際交流の歴史を背景として、文化創造の拠点となる施設とのこと。コンクリートでできたモダンな建築物だが、震災以前からあったもののようだ。客席から海が見えるホールや水に浮かぶ野外劇場シアターがある。

ちょうど東日本大震災と関連づけた大漁旗展をやっており、面白かった。現在のように鮮やかな色で染めるようになったのは、戦後、漁業が盛んになり、化学染料が出回ってからで、それまでは紺一色の旗だった。豊漁を祈る大漁旗のモチーフには、昔から縁起物が用いられ、鯛、宝船、鶴亀、まぐろ、七福神、江部素などが描かれていたという。

大漁旗は、もともと、大漁を祈念するものだが、東日本大震災後は復興を願うものとしても使われるようになった。たしかに、沿岸部のあちこちで大漁旗を眼にしてきた。







## 多賀城のプロジェクト

### 東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS)

2019年10月4日(金)、東北大学の災害科学国際研究所 IRIDeS を訪ね、上山真知子先生やスタッフのみなさんに案内してもらった。IRIDeS は東日本大震災1年後にでき、文理融合を掲げている。『大津波 The TSUNAMI 3.11 未来への記憶』という25分の映画を観た。これはNHKと協同で制作したものであり、80分版もあり、神戸の人と未来防災センターでも見ることができるそうだ。

それから、古文書レスキュー活動についての話を聞いた。津波などの災害によって古文書や古い資料が流され失われていく中で、それらを見つけ修復していく活動だ。古文書から地震の記載を拾い出し、どう減災を生かしていくのかも研究している。

もともと奥村弘神戸大教授が資料保存をしていて、阪神淡路の時に文化庁と資料ネットを立ち上げた。文化の復興には15~20年かかる。災害によってすべてがなくなると、自分や自分のまわり全体との関りが急激に意識化される。アイデンティティが途切れてしまうということが揺さぶりをかけ、縁(よすが)を求めるのである。"Build back better"の参照枠が求められ、人は、自分と自分のまわりを考え直し、過去と未来の分断を埋めようとする。

今回の活動を通して、平常時から地域と共に活動することが大事だとわかったという。今は古文書の会も複数でき、「蘇る石巻の歴史」などの講座もあるそうだ。古文書レスキューをしていると、「モノよりも先に人

だろう」という批判を受けてきたが、先代から引き継がれてきた古文書を守ることがその土地に生きてきた人々の記憶を救う。街がすっかり変わったので、とくにこういうものが必要になる。

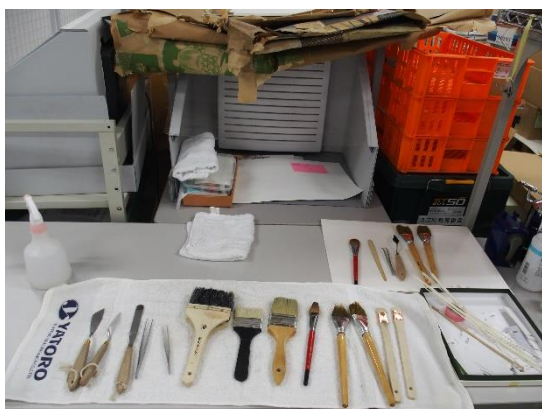
福島でも長期避難で歴史や文化が消えてしまうのではないかという危機感があり、2012 年初めてレスキューに入ることが可能となった。物を助けることは人を助けること。福島ではとくにそうである。

その後、実際の作業現場を見せてもらった。さまざまなサイズの筆や新聞紙、古文書にカビのが繁殖を防ぐための $-30^{\circ}\text{C}$  の冷凍庫や乾燥機などたくさんのものが置かれてあり、貴重な古文書が所狭しと保管されていた。被災した古文書を一枚ずつ修復していくのは、最先端の技術を導入しながらも、地道で気の遠くなるような作業であることがよくわかった。

大学と地域のボランティアが協力する形で、復興の一端を担っている。古文書の持ち主にとっても、自分たちの先祖が地域に貢献していた一面を知る機会となり、地域の力を再認識できる活動である。ボランティアには高齢者の方々が多数参加しており、肉体労働はできなくても、こういった活動から自分たちの貢献意識が芽生える。







## 支援者交流会

夜は支援者交流会が予定されていたので、多賀城まで移動し、多賀城市立図書館へ向かった。毎年会う懐かしいお顔、初めてのお顔もあった。

おおぞら保育園からは、いつもお世話になっている黒川先生のほか、2012年のセミナーに参加して下さっていた震災時お腹の大きかった先生が来て下さっていた。今はその子も8歳となり、その後、4歳の子もいる。両方とも男の子だそう。あれから流れた年月を思い、何だか感無量である。初めてトレーラーハウスの保育園を訪ねた時のことなど懐かしく語り合う。

他方、「もう被災地ではない」とおっしゃった方の話は胸に刺さった。「自分はもう忘れない。震災遺構も残してほしい。次々と災害は起こる。被災地だとまだ思っているのは、身内を亡くしてまだ立ち直れない人と経済的に立ち行かない人。自分の親は昭和8年の津波ですべて失ったが、あの時は誰も何もしてくれなかったと言っている。今は何をしてくれなどと言う人たちがいる。支援者が来て、これで頑張ってくださいとお金を渡す人たちがいて、海辺でそれをじっと待っている人もいた。」

その語りの中には、幾重にも重なる複雑な思いが重層して感じられ、考えさせられるものとなった。





## プロジェクト

10月5日（土）の午前は、鶴野先生のコーディネートのもと、多賀城民話の会、おおぞら保育園のみなさんとのコラボによって、「うたとおはなしと伝承遊びを楽しもう遊びのワークショップ」が開催された。今年はお父さん連れも目立ち、たくさんの親子、家族が早くから待っていてくれた。たまたま通りがかった子どもたちも入れ替わり立ち替わり、計40名ほどが参加してくれた。

多賀城民話の会のみなさんは、子どもの年齢に合わせた民話や手遊びを工夫して準備してくれていた。幼い子どもでもわかるような笑い話や動物が出てくる話、「かっぱ かっぱ かっぱ」の手遊びなど、子どもも大人も魅きつけられていた。おおぞら保育園からは、先生たちがマジックなど楽しい出し物、その後、園の保護者による絵本の読み聞かせが行われた。子どもたちとの関りが暖かく、ほのぼのした気持ちになる。

それから、鶴野先生によるびゅんびゅんゴマとお手玉などの伝承遊び。子どもたちはもちろんのこと、お父さんやお母さんたちもかなり真剣にチャレンジしていた。おおぞら保育園からは手作りのコースターと折り紙、民話の会からしおりのお土産が配られた。「地元の民話から手遊び、読み聞かせ等々。バリエーションがあって楽しかったです。子ども（3歳）も楽しんでいました。」

（30代女性）、「お手玉がおもしろかった。わらべうたもぜんぶ楽しかった。」（10代女性）、「民話や手遊びなどは若い家族では伝わらないので、こういう会を通じて子どもたちに広まってほしいです。」（70代女性）などの声が届いた。





漫画トークは、今年も1階のオープンスペースで行われた。毎年楽しみに遠方から来て下さる人から、通りがかりに足を止めて聞いている人まで参加の仕方はいろいろで、34名が集まった。

参加して下さった方と少し言葉を交わしたが、震災でご家族とペットを亡くし、鬱

のようになっていたが、友達や家族と話しながら、頑張らなくてもいいんだと言い聞かせつつ日々過ごしておられるとのこと。街はすっかり新しくなり、震災の影は見えにくくなってきていても、そっと影を抱えつつ生きている人々がいることに思いを馳せることができたらとあらためて思う。

「いつも団先生のトーク楽しみにしています。キュンとなる話、なるほどなるほどの話、明日からやってみようと思える話、とても心の栄養になる話ばかりです。」(50代女性)、「今年も来てくださり、先生のお話が聞けることうれしく思いました。“継続”ということの“重さ”“信頼”、心にとっても留まりました。“見ているよ”のメッセージは大切なこと、心にしみました。」(50代女性)、「無理解と個人情報の課題の矛盾、痛感しています。震災から9年。応援を続けていただいていることに感謝申し上げます。」(60代女性)などの声を頂いた。

終了後の反省会では、十年を過ぎた後の見通しを含め、関係者で議論し、根幹にある思いまで含めていろいろと語り合うことができた。今日の遊びイベントでは、今後につなげていけるよう、歴史郷土史の担当の女性をつけてくれたのだという。図書館で震災をとりあげるかどうかの判断が必要で、ずっと避けてきたが、先日初めて企業の話を取りあげたそう。ワークショップでは、これまで横の拡がりだったが、縦の重要性を感じたのがいちばん印象的だったそうで、どのように世代や時間をつないでいけるのか、若い層はどうアピールされるのかなど院生たちを交えて話した。蓄積してきた年月の重みを実感する。





## 新地町のフィールドワーク

10月6日（日）朝、多賀城駅から仙台駅を經由して新地駅へ。東北大学の川島秀一先生とその「親方」である漁師の小野さんが出迎えてくれた。お二人の車に分乗して、まず大戸浜の集会所へ行き、午前中は川島先生のお話を伺った。

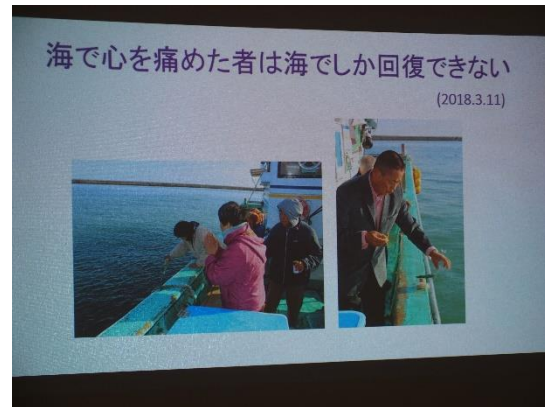
川島先生は、長く漁労文化を研究してきた民俗学者だが、震災後、新地に通うなかで、この地の文化が消えてしまうのではないかと、「100年後、200年後の子孫に何があったか正確に伝えたい。そのために川島先生に記録として残してほしい」という小野さんの強い思いを受けて、漁師の見習いを始め、午前1時に船に乗り込んで漁師の仕事と記録を続けている。

海に生きる漁師たちが作り上げてきた文化や信仰、津波を含む海難との向き合い方など興味深い話だった。三陸沖では、津波も大漁も、大きな回帰的な時間のなかで到来する。人々は海からもたらされる幸も不幸も繰り返しやってくるという捉えかたをしていた。しかし、震災後、漁師という海の文化に丘の理論が当てはめられているのではないかということだった。

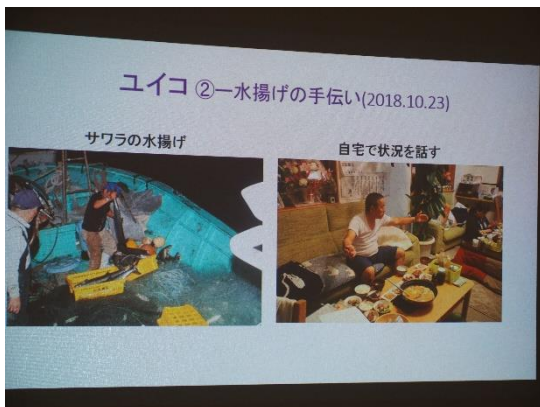
「海で心を痛めた者は、海でしか回復できない」という言葉が印象に残る。今回の震災で、川島先生は母を亡くし、小野さんは沖出しをした漁師の弟さんを亡くされており、海で慰霊をされたようだ。

お昼は、鹿狼山腹の「鹿狼の湯」で、かき揚げ蕎麦を食べ、おはぎを買った。午後から再び集会所で小野さん（67才）と若手の漁師荒さん（47才）のお話を伺った。





新地町では、試験操業のため、現在でも震災前の半分ほどしか漁業を行なうことができない。震災以前は週6回、漁に出ていたが、震災直後は瓦礫の撤去や放射能のサンプル調査に出かけるくらいしかできなかった。4年目以降は試験操業が始まり、週1回だけ漁に出かけに行くことができるようになった。しかし、以前のように、自分の判断で自由に漁を行うことはできない。現在は週3-4回漁に出かけているが、本格的な操業に移行することができない。空いた時間、みなで漁業の勉強をしている。



また福島で獲れた魚は他の地域の魚より値が安い。福島だからという理由で他県より二倍の厳しい基準を設けているが、99%問題はないのに、地元民までも「あまり福島のは食べたくないし、ましてや子どもには食べさせたくない」と言って、宮城産の魚を購入する。こんな状況では復興はありえない。いつまで続くのか見通しが立たず、次の世代が漁業で食べていけるのかなど不安であるということだった。たしかに、魚が周遊する海に県境はないはずだ。



現在は若者を育成したいと思っているそうで、大学生も是非漁業に参加してほしいとのことだった。



小野さんの弟さんは、沖出しで少し遅れ、無線の声では、途中、機械が動かなくなっらしく、犠牲になってしまった。小野さんをはじめ、皆言い伝えられてきたように、沖出しをして船が助かったが、小野さんは、弟さんのことがあってから、「沖出しはするな」と言っている。でも、荒さんは、「それでもやっぱり自分はすると思う」と言った。船は一艘1億5000万円もするという。災害時、正しい選択、間違った選択はないのだろう。その時々でそれぞれが引き受けていかなければならない厳しさを思った。

それから、釣師浜港へ案内してもらった。県道バイパスは住宅地に津波がこないように高く整備され、漁師さんたちの家があったバイパスを挟む平地は災害危険区域に指定された。市がその土地を買い取り、防災緑地化の整備をしていくようだ。現在は、震災以前から例祭が行われていたという安波津野神社がボツンとあるだけだった。

来年から小学生になるという荒さんの娘さんも午前中から一緒についてきていたが、お父さんの船がとても誇らしいようで、手を引いて船内を案内してくれた。そして、「ヒミツね」と言って操縦室の下の神棚の部屋を見せてくれた。子ども一人入れるか位の船室に白木の神棚とおそらく航海の守り神のお札(海上安全、大漁祈願)等が沢山祀ってあった。苦難に満ちていても、海とともに生きようとする人々の姿勢にこれからも是非学んでいきたいと思った。





つづく

